ようこそ目黒区へ

その時、目黒区広報課Aさんの前に、まばゆい光に照らされた二つの人影が現れた。
一人は鎧兜の若武者、もう一人は巨漢の僧兵。
「追い詰めたぞ！平家一門」
渾身の力を込めた薙刀を振り下ろす僧兵。
「待ってください！わたし平家じゃありません」
尻もちをつき、激しく首を振って全力の否定をする広報Aさん。
「待て弁慶！様子がおかしい」
若武者の制止で、大男はぴたりと動きを止めた。
「そこの娘、我らは壇之浦に平家を追い詰めていたはずだが、ここはどこだ？」
「あの、こ、ここは東京の目黒区ですけど…」
「東京？目黒区？聞いたこともないな」
平家、弁慶、壇之浦という単語で広報Aさんが何かを閃いた。
「もしかしてあなたは源義経さんですか？」
「いかにも源九郎判官義経とは儂のことだ」
半分冗談で尋ねたのだが、若武者は真剣そのものだ。
（今日ってエープリルフール？それともハロウィーン…？
いや違う今日は【中目黒夏まつり】の日だ！）
華やかなダンスチームによる「阿波踊り」と「よさこい」が楽しめるイベント。
（そうか、この人たちはお祭りの参加者で今年は仮装して踊るんだ！
なら早く会場に行かないと）
「すみません、大至急お連れしますね」
広報Aさんにうながされ二人は祭の会場へ。

「なんだここは？」
戦場には似つかぬ安穏とした光景に若武者は不満顔。
後ろに控えていた大男の僧兵がずいっと前に乗り出す。
「おい娘、我らは戦をしておるのだ。戯れも大概にせい」
「ええ、まだ続けるんですか？いまの日本に戦なんてありませんよ」
「戦が無い…いまの日本…」
つぶやくと若武者は何かを思案するように沈黙した。
そこへ「よさこい」の陽気な音色が響き渡る。
「あ、次のダンスチームの演目が始まりましたよ」
ダンサーたちの力強く統制の取れたパフォーマンス。
誰もかれもが生きる喜びを体現しているようだ。
「これが戦の無い世の有様か…なんと…心地良い響き」
若武者は居ても立ってもいられず踊りの輪の中へ飛び込んだ。
「弁慶！お主も踊れ！なんとも愉快だ！」
「九郎殿！これはなかなか難しゅうござるな」
二人が心から楽しそうに踊る様子を見て広報Aさんも微笑んだ。
（あの二人、もしかして本物の義経と弁慶？）
思い切って二人へ呼びかけてみる。
ひとしきり踊り、満ち足りた笑顔で若武者が応える。
「おう娘。この地への導き感謝するぞ」
「この弁慶、あまりの楽しさに戦を忘れており申した」
「いまの日本は80年近く戦争の無い平和な国なんですよ」
「80年も戦が無い？我らはそれほどの刻を跳んだとでも？」
「お二人のいた時代からだと…800年以上経ってますよ」
「不可思議なこともあるものだ。戦しか知らずに生きてきたが、
平和とはこれほど多くの民を笑顔にする。まこと尊きものだな」
祭提灯に照らされた義経の横顔は晴れやかだった。
「うむ、儂はこの地が気に入ったぞ」
嬉しそうに聞いていた広報Aさんは二人に尋ねた。
「あの、もし行くあてがないのなら、しばらくここで暮らしてみませんか？」
そこには満面の笑みでうなずく二人の姿。
こうして目黒区に新たな住人が加わった。

16 平和と公正をすべての人に